

宿縁

二月号

千葉県市川市国府台五丁目二十六番二十九号

浄土真宗
本願寺派 中原寺

TEL 0477-372102
FAX 0477-372102

人間の弱さから 生まれる真の強さ



一月から二月にかけては受験シーズンで、その世代の子どもを持つ家庭では張り詰めた空気に包まれます。人生における通過時期としてはあまり好ましい印象ではないかもしれせん。

古代インドの人生論に、人生を四つに区切る「四住期」(しじゅうき)という思想があります。これは社会的規範を記したヒンドウ教の「マヌ法典」にあり、四住期という概念は生まれました。

その内容は、①学生期(がくしゅうき)。ま

だ一人前ではなく、学び、心身の鍛錬を通して成長していく期間。②家住期(かじゅうき)。仕事を心得て懸命に働き、結婚をし、家庭を持ち、子を育てるために頑張る時期。③林住期(りんじゅうき)。世俗を離れ、迷いが晴れ、自分らしく自由に人間らしく生きる時期。④最後は遊行期(ゆぎょうき)。人生の最後の場を求め、遊ぶように何者にも囚われない人生の最終地点という概念です。

どうでしょう？この概念は今でもどこかうなずけるものがあります。

現代では「お受験！」は戦争であり、厳しい人生を生き抜く当たり前の社会現象と受け取られています。そしてこの世に生を受けてまだ間もない幼児期から「受験戦争」の「学生期」に突入するといっても過言ではありません。そして、子どもを馬に例えればその競争馬に鞭を与える騎手の多くは「ママ」の役目となっています。

おうまのおやは なかよしこよし
いつでもいっしょに
ぼっくりぼっくりあるく

おうまのかあさん やさしいかあさん
こうまをみながら
ぼっくりぼっくりあるく

競争社会に組み込まれる現代の「学生期」は、右の童謡から連想されるのどかでゆつたりとした親子の姿ではありません。

福沢諭吉とその母の話はよく知られています。大分県中津に生れた諭吉は、篤信の母が毎朝お仏壇の前で唱える「御文章(ごぶんしよう)」の声を聞きながら育ちました。

「御文章」は、蓮如上人が浄土真宗のみ教えを人々の生活に即してわかりやすく伝えるためにしたためられた八十通ある消息体で、「おふみ」と呼ばれ、真宗門徒は古くからこの一通一通を拝読することを日常としてきました。

福沢諭吉はその母から多大な影響を受け、「御文章」をつねに愛読していたそうです。その中でも次の御文章(五帖二通「八万の法蔵章」)を最も大切にされていたと聞きます。

『それ、八万の法蔵をしるというとも、後世をしらざる人を愚者とす。たとい一文不知の尼入道なりというとも、後世をしるを智者とすといえり。しかれば当流のころは、あながちにもろもろの聖教をよみ、ものをしりたりというとも、一念の信心のいわれをしらざる人は、いたざらざらとなりしるべし。されば、聖人の御ことばにも、一切の男女たらん身は、弥陀の本願を信ぜずしては、ふつと決してたすかるといふことあるべからずと仰せられたり。このゆえにいかなる女人なりというとも、もろもろの雑行をすてて、一念に弥陀如来今度の後生たすけたまえと、ふかくたのみもうさん人は、十人も百人も、みなともに弥陀の報土に往生すべきこと、さらさら、疑あるべからざるものなり。あなかしこ々』

(釈尊がお説きになった教えをすべて知っているとしても、後世のことを知らないものは愚者であり、たとえ文字一つ知らないとし

ても、浄土に往生するいわれを知るものは、智者であるといえます。ですから、浄土真宗では、たくさん聖教を読んでいろいろなことを知っていても、信心一つでたすかるといふいわれを知らなければ、むなしなことだと思わなければなりません。親鸞聖人の言葉にも、どんな人も、阿弥陀如来の本願を信じなければ、決してたすかるとはならない、とあります。ですから、どういう人であろうと、自力にたよることをやめて、おたすけくださいと二心なく深く阿弥陀如来を信じおまかせするならば、十人は十人、百人は百人、みな浄土に往生できることは、まったく疑いありません。)

「後世・後生」とは、人生の一大事(生死)の解決。「尼」とは、子育て中の女性です。蓮如上人は御文章の数多くに「尼女房・「女人」を対象として阿弥陀如来の救いの目あてを特に女性にあることを述べています。そのことは長い歴史において、女人や根欠(身体の不自由な人)を卑しいものとみる社会通念が支配的であった時代にあつて、阿弥陀仏の救いの平等性をあらわすことによつて、差別の社会通念を破り、女人や根欠に救いをもたらそうとしたのです。

福沢諭吉は「学問ノススメ」の冒頭で「天は人の上に人を造らず、人の下に人を造らず」とアメリカの独立宣言の一節を挙げています。

父を早くに亡くし、母親に育てられた諭吉の母は、常に凛とした姿勢を貫き「人としてあるべき道」を我がうしろ姿をもって子どもたちに説いていました。今や、親が子どもに教えるべきことは何か？を考える時期です。

【寺灯雑記】

○元旦修正会にて新年の幕開け

1/1

初日の出が境内を照らすなかに元旦の8時より元旦修正会をお勤めいたしました。朝早く、まだ寒いなかではありましたが、参詣の皆さんとともに新年を迎えた慶びを阿弥陀さまに報告いたしました。

正信偈のお勤めに続き、元旦章の拝読、住職と前任職の年頭法話を聴聞しました。

また、今年よりご流盃の儀ではお屠蘇に加えて甘酒(ノンアルコール)をご用意いたしました。お酒の苦手な方、未成年の方も一緒に乾杯をすることができました。

今年も、皆さんとともに阿弥陀さまの御心を聴聞し、お念仏申す一年にしたいと願っております。

○初法座となる常例法座

1/22

今年の初法座となる常例法座が開かれました。

ご講師の荒木尚太師は、にこやかな表情と優しい語り口で、阿弥陀如来のはたらきである往相と還相について、ご自身の経験を交えてお話しくださいました。

○千葉組仏壮研修会に参加

1/25

3年ぶりとなる千葉組仏教壮年会の研修会が千葉市民会館で行われ、十年に一度といわれる寒波襲来のなか、千葉県各地より約50名、中原寺からも4名が参加いたしました。

研修テーマは「織田信長と石山合戦を通じて東西に別れた本願寺の歴史」ということで、柏市西方寺の西原大地師より講義いただきました。

一般的なイメージとは異なる織田信長の意外な人物像や、本願寺が東西に分裂した時代背景、また東西における教義の特色など、多岐にわたり興味深いお話をされ、実りある研修会となりました。

○婦人会・壮年会の年次総会を開催

1/7、1/28

仏教婦人会。壮年会の各年次総会が開かれ、予算決算や行事報告、新年度行事計画などが承認されました。

壮年会では役員改選が行われ、昨年度まで会長を勤められた盛田好一さんより新たに太田清史さんが就任することとなりました。

婦人会、壮年会ともに新規会員を募集しておりますので、ご興味がある方はどうぞお気軽にお問い合わせください。

【ブツダの教え 「お経」のことば】

「どこにもない芥子(けし)の実」

裕福な家の若い嫁であったキサーゴータミーは、そのひとり子の男の子が、幼くして亡くなったので、悲しみに打ちひしがれ、冷たい遺体を抱いて町に出て、子供の病を治す者はいないかと尋ね回った。

この女をどうすることもできず、町の人びとはただ哀れげに見送るだけであったが、釈尊の信者がこれを見かねて、その女に祇園精舎(ぎおんしょうじゃ)の釈尊の

もとに行くようにすすめた。彼女は早速、釈尊のもとに子供を抱いて行った。

釈尊は静かにその様子を見て、「女よ、この子の病を治すには、芥子の実がいる。町に出て四、五粒もらってくるがよい。しかし、その芥子の実は、まだ一度も死者の出ない家からもらってこなければならぬ。」と言われた。

母は、町に出て芥子の実を求めた。芥子の実は得やすかったけれども、死人の出ない家は、どこにも求めることができなかった。ついに求める芥子の実が得ることができず、釈尊のもとにもどった。彼女は釈尊の静かな姿に接し、初めて釈尊のことばの意味をさとり、夢から覚めたように気がつき、わが子の冷たい遺体を墓所におき、釈尊のもとに帰ってきて弟子になった。

『パーリ長老尼偈経』

【二月の法座・行事案内】

○婦人会法座

*二月四日(土) 一時

御文章に学ぶ(二帖第七通) 前住職

○子育てサロン(パンダっ子)

*二月十三日(月) 十一時~十四時

○常例法座(仏さまの教え)

*二月十九日(日) 一時

法話 渡邊恒行師(船橋市・浄興寺)

○門信徒役員会

*二月十九日(日) 三時半

ご欠席の方はお寺までご連絡ください。

○壮年会法座

*二月二十三日(金・祝) 三時

御文章を学ぶ(二帖第五通) 住職

○教行信証を学ぶ

*二月二十五日(土) 二時

総括 前住職

※築地本願寺 涅槃会布教大会

二月十五日は、「お釈迦様が亡くなられた(仏教では「涅槃に入られた」)日」と伝えられています。この日をご縁に築地本願寺にて仏さまのお話を聴いてみませんか?

日程:午後一時半~開会式

午後一時四〇分~三時半まで

場所:築地本願寺「講堂」

参加費無料、申込不要

・当日、築地本願寺 YouTube にてライブ配信

されます

【二月の掲示板のことば】

自分は弱い人間だ

そのことを認めると

どこからか強さが

生まれる

【年会費納入のお願い】

新年度に入りました。

世情ご多端の折恐縮ですが、門信徒会会員の皆様には郵便払込取扱票を同封させていただきますので、門信徒会費(本堂修繕積立金を含む)並びに墓地管理料(当寺にお墓のある方)の納入をよろしくお願い申し上げます。